



Title	2024 年度（秋冬学期） 日本語5（文法）実践報告
Author(s)	荒島, 和子
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 52-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102680
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

2024 年度（秋冬学期） 日本語 5（文法）実践報告

荒島 和子

1. はじめに

本稿では、2024 年度秋冬学期の「日本語 5」について報告する。この授業は 1 年生の学部留学生が受講する授業であり、受講生は 10 名で出身別には中国、韓国、台湾、ミャンマー、トルコであった。

このクラスでは「方言」や「若者ことば」など身近な話題について分析し、なぜそのような現象が起こるのか、自ら考える力を身につけながら日本語の特徴を知ることを目的とした。学生同士のディスカッションやグループ・ワークを取り入れ、他の学生との対話を通して自分の考えを深めたり、新たな視点に気が付いたりできるようになることを目指した。

学習目標は以下の三点である。

- ①日本語の仕組みを多角的視点から分析することができる。
- ②自分の考えを他の学生にわかりやすく論理的に伝えることができる。
- ③他の学生との議論を通して、自分の考えを発展させることができる。

2. 授業の概要

テキストとして、野田尚史・野田春美（2017）『日本語を分析するためのレッスン』を使用した。このテキストは「大学や短大の初年次教育科目や言語関係の基礎科目的テキストとして、アクティブ・ラーニングを行いやすいように作ったもの（p.vi）」であり、グループワークを想定して作成されている。全部で 15 のレッスンがあり、各レッスンにはそれぞれ 4 つの問題が設定されている。例えば「若者ことば」のレッスンでは、問題 1 は「略して使う若者ことば」、問題 2 は「程度が高いことを表すことば」、問題 3 は「あいまいにぼかす若者ことば」、問題 4 は「ちがう」の若者ことば」といった具合である。各レッスンの扉の部分には導入として具体的な文例や会話例があり、そのレッスンでどのような問題を扱うのかがわかりやすく紹介されている。そして、各問題にも具体的な例が提示され、「どのような現象が起こっているのか」というシンプルな問い合わせから「なぜそのような現象が起こるのか」「同じような他の例を挙げ

てみる」といった深いレベルの問い合わせまで様々に設定されている。また、各問題には「考えるときのヒント」も設けられており、問題を読むだけではわからにくい部分も、ヒントを読むことによって答えを導き出せるように工夫されている。さらに、各レッスンの最後のページには「課題」が 3 つずつあり、宿題やレポートの課題として活用できるようになっており、筆者も期末レポートとしてこの課題を利用した。

先にも述べたように、このテキストは初年次教育や言語関係の基礎科目のテキストとして作られたものであり、留学生の日本語科目的ために作られたわけではない。そのため、日本語母語話者ではない留学生にとっては難しいと思われるトピックや馴染みがないトピック、例えば早口ことばや回文を扱う「ことば遊び」や「しりとり」といったトピックも含まれている。しかし、逆に言えば、日本語学習者としての視点を生かした分析ができることも期待できる。また、学生たちは大学に入学してからまだ半年で、各分野の概論的知識しか持っていないことから、専門分野を決め卒業論文のテーマを考える際の一つの参考資料となるよう、できるだけ幅広いテーマを扱いたいと考えた。そして、今後の専門的な学習・研究に役立つような分析力を養い、多角的な視点を持つことが必要であるという考え方から、このテキストを選択した。

3. 授業の進め方

初回の授業では問題の解き方、考え方を理解するために、クラス全体でレッスン 1 の問題 1、2 に取り組んだ。コース前半はグループでの分析とし、3~4 人のグループごとに各問題について考え、グループでまとめた解答をクラス全体で共有し、ディスカッションするという流れで進めた。コース後半は学生の個人発表とし、レッスンの中から各自興味のあるレッスンの問題を 1 つ選んで担当者を決めた。担当学生は学術的な文献を調べて根拠を挙げること、そして、自分の考え方や調べたことを単に発表するだけではなく、他の学生に議論を促し、授業を主導する

形で進めることとした。担当者によっては同じレッスンの中の複数の問題をまとめて担当することもあった。

授業の内容と扱ったトピックは表1の通りである。

表1 授業内容とトピック

回	授業内容	トピック
1	ガイダンス 全体での分析	授業の説明、自己紹介 L1 しりとり
2	グループでの分析①	L1 しりとり
3	グループでの分析②	L2 ことばの意味
4	グループでの分析③	L2 ことばの意味
5	グループでの分析④	L2 ことばの意味 L8 話しことばと書き ことば
6	グループでの分析⑤	L8 話しことばと書き ことば
7	グループでの分析⑥	L10 カタカナ
8	グループでの分析⑦	L10 カタカナ L13 丁寧体と普通体
9	学生による発表①	L3 若者ことば L5 会話の失敗
10	学生による発表②	L5 会話の失敗
11	学生による発表③	L7 ことば遊び L9 あいまい文
12	学生による発表④	L11 マンガのことば
13	学生による発表⑤	L12 方言 L14 漫才のことば
14	学生による発表⑥ グループでの分析⑧	L4 和語・漢語・外来語
15	グループでの分析⑨ 総括 授業評価アンケート	L4 和語・漢語・外来語

レッスン1と2は全体での分析とグループでの分析で扱うことを事前に決めていた。それ以外のグループでの分析で扱ったレッスンは、4回目の授業で発表の担当者を決めた際に、誰も選ばなかったレッスンから選んだ。筆者がこのテキストを使って授業をするのは初めてではないが、学生が興味を持つレッスンは一様ではない。今年度のクラスでは、過去のクラスで選ばれることができなかった「会話の失敗」や「ことば遊び」を選択した学生があり、各レッスンが比較的満遍なく選ばれた印象である。

4. 学生の反応と今後の課題

ここからは授業評価アンケートの結果に基づいて学生からの反応と今後の課題について述べる。

まず、この授業を受けて理解が深まったことを尋ねた質問では、「日本語について考えること、普段気にしたことのないことを探求すること」「日本語の面白いポイントが学べました」「日本語の様々な法則性について知ることができました」という意見が見られた。テキストの前書きに書いてある、「無意識に使っている日本語の奥にひそむ法則性を見つけ出してほしい(p.v)」という狙いは、ある程度達成できたのではないだろうか。次に、この授業を受けてさらに興味を持つようになったことを尋ねたところ、「漢語と和語の使い分け」「言葉のニュアンス、意味の範囲」「方言」「漫才」「若者ことば」など、学生によって回答が様々で、各学生の興味の幅が広がったことが窺えた。

グループでのディスカッションについては概ね好評であった。「コース後半の発表よりもディスカッションしたほうがもっと頭に内容が入る」という意見や、「ディスカッションの時間を増やしてほしい」という意見が見られた。学生による発表では、自分の考えや調べたことを単に発表するだけではなく、他の学生に議論を促すことを目指したが、深い議論にまで発展させることができなかつたように思う。また「教科書に執着しすぎた気がする」という意見があつたことから、今後はテキストの問題からさらに発展させた問題についても考える機会を増やし、より深い学びにつなげ、学習意欲を高められるように改善していきたい。

【テキスト】

野田尚史・野田春美(2017)『日本語を分析するレッスン〈アクティブ・ラーニング対応〉』大修館書店